

## パンデミックはいかなる「生」を問題にするか：現代フランス哲学の立場から

渡名喜庸哲（立教大学）

2023年1月にジャン＝ピエール・デュピュイ著『カタストロフか生か：コロナ懐疑主義批判』を上梓した。『ツナミの小形而上学』をはじめ、「カタストロフ」に対して哲学的な考察を行ってきた思想家の COVID-19 論である。コロナ禍をめぐる哲学的な議論では、フーコー／アガンベンの「生権力／生政治」の概念が援用されることがあるが（主にロックダウン等の施策に対し、「剥き出しの生」を守るために人間的・文化的生を犠牲にしているという趣旨の議論）、デュピュイはこの援用を批判するかたちで「生」をめぐる考察を展開する点で興味深い。

ただ、同書は、断章形式ということもあり、パンデミックにおける「生」とは何かがそれほど明確に浮かび上がる訳ではない。本発表では、デュピュイ以外にも近年のフランス哲学におけるパンデミック論を概観しつつ、「生政治」の概念はパンデミックにさらされた「生」を考えるのに適切なのか、パンデミックにおける「生」を考えるにはどのような哲学的なアプローチがありうるのかといった問いを検討したい。